

◆書評◆

柳原恵著

『^{けがい}〈化外〉のフェミニズム

岩手・麗ら舎読書会の〈おなご〉たち』

(ドメス出版 2018年 ISBN:978-4-8107-0838-7 3600円+税)



嶽本 新奈

(学振PD・明治学院大学社会学付属研究所)

本書は、戦後の東北・岩手において生まれたフェミニズムの思想と活動の内実を明らかにし、それらを日本のフェミニズム史のなかに位置づけることを目指した書である。重要なのは、岩手という地域で「生まれた」フェミニズム思想・実践であって、都市部（中央）からの輸入ではないという点である。当初は既存のリブの中に位置づくものとして著者自身も捉えていたが、調査を重ねるなかで実は独自の系譜をもつフェミニズムとして把握されるべきものであるとの気づきを得たという。本書はまさにその起源と独自性を見定めるための書である。

章構成に沿って内容を紹介していきたい。序章では、フェミニズムの研究史を整理し、視座と方法論が提示される。著者の問題意識は、日本のフェミニズムは都市部（中央）の女性の生きづらさから始まっており、その「女性」というカテゴリーに都市とは異なる近代化を生きた地方の女性が入っていないのではないか、という点であった。だからこそ、「中央」に比べて保守

的とされる東北・岩手で生きる女性たちのフェミニズム思想と実践を明らかにすることで日本のフェミニズムの多様性と複層性を示しうるとする。

第一章と第二章では、実践の場となっている麗ら舎読書会の中心人物である小原麗子と石川純子がそれぞれ取り上げられ、その思想の来歴と内実が著作物とインタビューによって検討される。第一章は麗ら舎読書会設立者である小原についてである。1935年に小作農家に生まれた小原は、農家の嫁になることを拒否して女中奉公へ飛び出した。当時の農家の嫁は、「牛馬同前に働くことを要求され、“角のない牛”とも形容された」という（54頁）。こうした農村の女に対する圧力への抵抗として小原は、経済的自立と自らの生き方を決定できる自由の獲得を求めたのだ（57頁）。これは女性の自立と解放を意味するフェミニズム思想と合致するが、このとき小原は「フェミニズム」という言葉をまだ知らなかった。小原がその言葉や思想を知らないながらもフェミニズム的思想を展開しえた背景

には、岩手の青年団運動および生活記録運動があったという。運動に参加した小原を含む女子青年にとって「書く」という行為は、農村におけるジェンダー規範を相対化し、〈おなご〉のステレオタイプを書き換えていく契機へと繋がっていったのだ（75頁）。

第二章では、小原とともに麗ら舎読書会を支えた石川の「孕みの思想」を軸に、石川のフェミニズムの内実が検討される。妊娠したことを契機に石川は「孕む」ことについて思索し、「女性特有の身体経験が、『男性の性的個性』で統括された既存の言葉では言い表すことができない」ということに気づく（96頁）。大学時代に男性（近代）的主体になろうとして失語状態に陥った石川はこうした気付きによって「孕んだ個我」という新しい女性的主体を発見し、女の身体感覚に即した言葉を紡ぎだそうとしたのだ（103頁）。

さらに石川は、農婦たちに聞き書きを始める。石川にとって「『東北の農婦』とは『化外』の地にあり『農民』であり『おなご』であるという『疎外の極地』にある存在」であった（111頁）。「『近代主義者』で『エゴイスト』でもあるという自己認識をもつ石川にとって、『農婦』の語りを聞くことは、彼女らが保持しているだろう知恵や内面的豊かさによって自己の枠組みを捉え返して内省」することであり、「『孕みの思想』の実践であった」と考察される（127頁）。

第三章は、麗ら舎読書会に集う女性たちに焦点を当て、エンパワーメントの観点から検討した章である。読書や語り合い、書

くという行為を通じて女性たちは自身が内面化していた「家」を基盤としたジェンダー規範を認識し、相対化していく。革新的な変化が訪れるはずもない地域に女性たちは留まりながら、自身を取り巻く権力と少しずつ交渉していくのだ。読書会はそうした女性たちの経験と知識を共有・蓄積し、エンパワーメントする「場」としての役割を果たしていると意義づけられる。

第四章は、麗ら舎読書会の活動のひとつである千三忌を対象として、女性たちが戦争、国家、ジェンダーという問題系をどのように把握してきたのかを検討した章である。千三忌とは、戦死した千三の母セキが「南無阿弥陀仏」とだけ刻んで路傍に建てた墓にお参りする行事である。石川たちは、「従来の墓」とは異なる墓を建立したセキの行為を、「和賀の『おなごたち』がつなぐ土着の反体制的民間宗教をもって国家から奪還した」行為として読み解く（202頁）。これはセキを母性主義的な平和運動に回収させないフェミニズム的視点からの批判的解釈である。千三忌を通して女性たちが、〈化外〉の地から戦争を支えたジェンダー構造を捉え直していく様子が描かれる。

第五章は、これまでの各章を踏まえ、岩手の〈おなご〉たちによるフェミニズムの思想と活動の総括がなされ、〈化外〉のフェミニズムとして提示される。これは、当地の女性たちが直面した地域性や課題に対して「自前の声で、日本の近代を問い直していく思想的営為」であったことが確認されるのだ。

さて、甚だ簡単に紹介をしてきたが、不勉強である評者にとって本書は大いに触発

される内容であった。著者の明快な問題意識のもとで提示された〈化外〉のフェミニズムは独自の系譜とともにその存在を説得的に読者に教えてくれる。そうした本書の意義は大いに認めつつ、最後に読んで惜しいと感じた点をふたつほど記したい。

一つ目は、森崎含めた九州のフェミニズムの思想・実践との異同についての言及が乏しい点である。読書会で最初に取り上げた本は森崎の『闘いとエロス』であったし、森崎や河野信子が発行していた『無名通信』に小原が寄稿したりなど、麗ら舎読書会のメンバーが九州との交流もっていたことが描かれているが(137・281頁)、思想的な影響が具体的にどの程度あったのかをもう少し詳しく知りたかった。読者の多くは石川の「孕みの思想」から森崎を連想するだろうし、端々に森崎と近い思想的痕跡や言葉を読み取ったであろう。だからこそ、森崎との類似点や差異を明確にしてもらえたならば、岩手と同じく「中央」から距離がある筑豊での森崎たちのサークル運動と麗ら舎読書会が、地方の近代化の時間及び空間の偏差を同じくするのか、それとも異なるのかその位置づけがより明瞭になったのではないかとの思いを抱いた。

二つ目は、本書の魅力でもある理論的解釈・補足の充溢についてである。本書では岩手の歴史的立場、女性の立場、ライフストーリー、麗ら舎読書会の実践といった多岐にわたる記述に対して、そのほとんどの

部分に適宜、適切な理論的解釈がなされている。ひとつひとつの事象の記述後すぐに理論的解釈がなされることによって、読者はその事象を即座に論理的に理解できるのだ。この構成が本書の魅力であることは言を俟たないが、あまりに理論的解釈が適切であるようにみえてしまうがゆえに、解釈の幅が狭くなってしまった感も否めないのではないだろうか。

たとえば、小原や石川の思想的軌跡が各章で展開されるが、ひとりの人間の思想の練り上げ過程には理解しがたい言葉・思想もあったのではないかと推察される。森崎にしても、その著作群のなかで思想的遍歴、矛盾、葛藤が見え隠れし、必ずしも全てを論理的に批評できるわけではない。読む側の解釈・理解からはみ出る余剰のようなものが「ことば」には常に存在すると評者は考える。小原や石川にもおそらくそうした余剰があったと思われるが、本書から読み取ることは難しい。率直に述べるならば、既存の理論では割り切れない余剰の部分に著者自身の批評が提示されていたならば、著者が目指した「〈化外〉のフェミニズム」の独自性がより明瞭になったのではないだろうか。とはいえ、これは本書が重厚であるが故のないものねだりのようなものなので、本書が今後のフェミニズム思想史における必読書であることは疑いようがないだろう。

(掲載決定日：2019年5月29日)